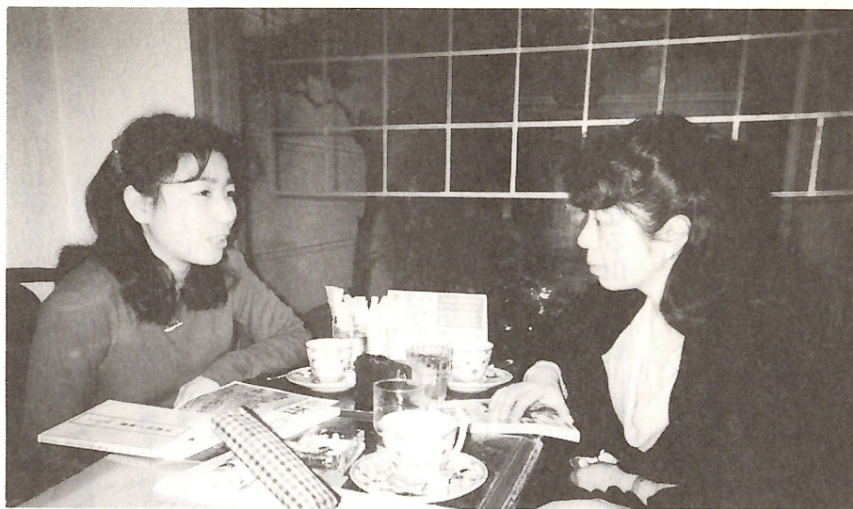


母娘対談 母から娘へ、娘から母へ

—河野裕子・永田 紅—



—このたびは歌壇賞受賞おめでとうございます。最初にお聞きになったときの感想はいかがでしたか。

紅 ありがとうございます。学校から帰ってきたら、母が黙って祝電を渡してくれて、誕生日でもないのに何かなあと思えました。

裕子 びっくりさせようかと……。

紅 締切りの日にギリギリで投函したあとは、応募したということだけで満足してしまっただけのところがあつて結果のことはあまり考えてなかったんです。やっぱりびっくりしました。あとから、急にうれしくなったりこわくなったり。

—京大短歌会の先輩には、梅内美華子さんや壇裕子さん、岸本由紀さんたちがおられますが、意識されましたか。

紅 四、五歳年上だけど、何となく親近感がありました。同じ京都やし、歌会なんかで一緒になることもあつたからかな、と思います。

—河野さんのご感想は？

裕子 とにかくびっくりした、というのが率直な感想です。祝電をいただいて、「あれまあ」という感じでした。タイトルを相談してきたんだよね、京都駅から電話で。二つか三つ出してきたんだよね。

紅 そう、歌の中から幾つか出して。

裕子 試験の最中だったからまさか応募するとは思っていません。

—受賞作をお読みになったのは雑誌が出てからですか。

裕子 そうなんです。お読みになった感想は？

裕子 三十首をまとめて読んでみると、この人の特徴がくつきり見えたという感じでしたね。内省的な感じと、清潔感というのかな。「ああ君が遠いよ月夜 下敷きを挟んだままのノート硬くて」これは、かなしいなあ。「感情がはみ出さぬよう努力する地上の秋を鳥は流れて」「しずもりていつもひとことたらざれば私は他人にたどりつけない」こういうのは、性格がよく出ていて、私なんかとまるで反対で……。

—御両親が歌人というわけですが、歌をつくりはじめたきっかけは何ですか。

紅 私が中学一年の時に、兄がつくりはじめたから、何となくくつついて始めたんです。それまでは特に短歌をつくらうとは思わなかった。抵抗感はなかった。自然にそんな環境やっただけです。

裕子 強制はしなかったですね。上の子が作りはじめたから、日記の代わりに作り始めたのかな。

—作った歌は見せますか。

紅 見せますよ。

裕子 見せる？時々やね。見せたり見せなかったり。

—河野さんにはお子さんを詠んだ歌が多くありますがそういう歌を読んでどうですか。

紅 あまり読んでないので（笑）。作りはじめた頃、読んでみようかと思つて読みかけたんですけど、その頃はまだ小さかつたんでよく分からなくてそのままになってしまつて。今、若い頃の歌は少し読んでますけど。文章の中で引用されている歌とか、歌会の歌を見るくらいです。やっぱり自分と同じくらいの年齢の時に詠まれた歌に共感します。だから「森のやうに獣のやうに」はよく分かる。

—他の受賞者と比べて、プレッシャーはより強いと思いませんか。

紅 今までそんなことはあんまり感じなかったけど、このよなインタビューを受けると、これからはプレッシャーにもなるのかな……と。親は歌人というよりは親やし。

裕子 まあ、そうやろね。今のところは、父親の仕事に近いようなこともしたいらしいので（注：永田和宏氏は最先端の医学関連の仕事に京都大学医学部で従事）、夜昼なく仕事をしながらにさせるのは母親としてはしんどいなあとあります。歌人として言えば、いかげんにしてほしくない。二、三日前に山田富士郎さんが共同通信の時評で、「永田紅の両親は永田宏和と河野裕子であつた、と言われるぐらいの歌人になれ」というようなことを書いておられましたが、そういうことでしょうか。

—これからこうした方がいい、というようなアドバイスは



▲ 河野裕子氏

ありますか？

裕子 まだ、そこまで行ってないですね。だいたい今までののくらい作ったんだろう。千首作ってないんじゃないかな。読む蓄積も少ないし、そういう評価に至るまでに及んでないんじゃないかな。もっとたくさん作らなくては。自分の子じゃない方がやりやすいですね。励ましたり、蹴飛ばしたり。――ご両親の歌で好きな歌は？

紅 お父さんの歌では「さみに逢う以前のぼくに遭いたくて海へのバスにゆられていたり」とか「スバルしずかに梢を渡りつつありと、はろばろと美し古典力学」や「日盛りを歩める黒衣グレゴール・メンデル一八六六年モラヴィアの夏」なんかが好きやわ。



▲ 永田紅氏

裕子 それはあるわね、新しい自分を見つけ出す喜び。
紅 言葉から出てくることもあるし、考えからでてくることもあるし。

裕子 どっちから出てくる？言葉から？

紅 どっちもある。言葉がへんにくっついて出てくることもあるし、感情の分析から出てくることもある。

裕子 分析しながら作るん？

紅 言葉にしようと思ったら分析してしまう。

裕子 私はいちいちそんなことしません。

紅 二通りあるのかな。翔ぶことによっては言葉がへんにくっついてしまうこともあるし。

裕子 歌の作り方が違うんかなあ。あなた歌を作る時は人の

裕子 あなた歌集読んで、いいなって思ったりするの？

紅 というか一冊読み切ることがなかなかできない。途中で考え込んだりして。お母さんの歌では、作り始めた頃は、「逆立ちしておまえがおれを眺めてた たつた一度きりのあの夏のこと」かな。

裕子 「逆立ち」が好きなの？

紅 最初に読んだから。

裕子 インプリンティングやね。

紅 出会った時期が良かったんかな。中学生やったからあんまり読める歌集もなかったし。

裕子 あんまり早く短歌に出会ったのかな。

紅 今はもつと読まなあかんのやろね。

裕子 それはそうやんか。

――歌をつくるということを、どのように考えていらっしゃるんですか。

紅 一カ月のうちに何日間か歌を作る時間がないと、流されていってしまうような気がします。

裕子 鍾がなくなってしまう。

紅 鍾かな、捕まえておくような時間。歌作るときに無理に引き出してくるその過程が一カ月の中の鍾になっているような気がする。自分のなかから、何かを出してくるという過程が。ふだんならつきつめて考えていないようなことを。新しい自分を引き出してくるのが楽しい。

作品をたくさん読んでから作る？助走時間の間にたくさん歌集読む？

紅 歌集以外のもの。自分の原稿用紙の昔の断片とか。上の句とか下の句だけしかできていないのとか。萩尾望都やら、学校の教科書やら、辞書をパラパラしたり。

裕子 そんなんやのに、徹夜してあなた、十首たらずでしょ。寡作型よね。

紅 なかなか一首にならない。考えすぎるんかな。

裕子 良くも悪くも、私はたくさん作る。たくさん。

――永田さんや河野さんが締切に追われているのを見てどうですか？

紅 特になんも(笑)。昔から、最初からそうでしたから。生まれた時から。夜遅く起きてるのもふつうやったし。

裕子 そうでしょうね。子供の側から見ると。

――河野さんには子供を叩く歌もあるけれど、叩かれたことは？

紅 叩くより、水かけたりして、激しかった。

裕子 (笑)あの頃は子育てで精いっぱい。

紅 歌で自分のことを歌われるのは、事実とは違うし、それはそれだと思ってます。おもしろいお母さんですよ(笑)。

裕子 おもしろいの？(笑)

紅 私にかかってきた電話でも私が出る前に友達と平気で喋るし。ふつうはねえ、「いつもお世話になっております」と

か言うんだよ。

裕子 あっそ。そういう挨拶とはぼすの。

——受賞作について、佐佐木さん、高野さんの推薦しなかった理由を読んでどうですか？

紅 短歌的にまとめすぎるとか、その通りだと思います。一つの言葉に集約させてゆくのでも自分でも気になってますし。——目標とする歌人は？どんな歌を作りたいですか？

紅 紀野恵さんの歌が好きなんです。「ゆめにあふひとのまなじりわたくしがゆめよりほかの何であらうか」「白き花の地にふりそぐかはたれやほの明るくて努力は嫌い」「晩冬の東海道は薄明りして海に添ひをらむ かへらな」一首目なんかは、意味で言えば「私」の存在の不確実性みたいなものなのでしょうけど、歌の韻律にのせると、意味で捉えられない何とも不思議な感じがして。はかなくて、悲しいのが……。「努力は嫌い」と言ってしまうようなメンタリティーも好きです。東海道の歌は、はじめは全然分からなかったんですけど。これが十代の作品だなんて。

裕子 紀野恵さんの歌が好きっていうのは、意外なような、びっくりするような。

紅 紀野恵さんは、ある時期の少女漫画を読んでいそうな感じ。萩尾望都さんあたりが好きそうに思えるの。紀野さんは言葉から作っていて、その言葉を読むと作者がどんな人か知りたくなる。

てるの。

紅 まだ見せてない。

裕子 文芸サークルの中で短歌作ってて違和感はない？

紅 作り始めた人もいるし、この間は三人歌載せてたし。

裕子 どんなふう在接受止められているのかな、短歌というのは。おもしろがられる？変だと思われる？

紅 京大短歌会でもね、短歌つくってて友達に隠して人多いよ。

裕子 へー。それはなんでやるねえ？

紅 うーん……やっぱり人にね、詩とか小説とか書いてるって言うのははさかしいのところがう（笑）？

裕子 それがわからん。私があんたの齢の時には授業中に歌を作ってそれを回覧してたんやって。こないだ友達がそう言ってたのを聞いてびっくりした。まるっきりそんなこと忘れてたの、私。

紅 みんな、なんて？感想が聞きたくて回したの？

裕子 そりゃあなた（笑）、そのほかに何があんのよ。

紅 文芸サークルみたいな集団に入ってしまったえば、その中ではいいんやけどね。自分の内面を表す作業をしている、なんて人に知られるのはけっこうはさかしい。

裕子 それはわかる。隣のおくさんと歌の話はできないもんね。それで、さつきあなた穂村さんのエッセイの話してたけど、歌ってやっぱり作者の顔が見えないとおもしろくないよ

裕子 作者が見えるんじゃないかって、作者を知りたく思うわけ？紀野さんは。

紅 そう、なんとなく、趣味が強そうな人でしょ。シャーロックホームズが好きとかワルツが好きとか。人が見えてきたほうがおもしろい。

裕子 人間が見えたほうがおもしろいね、穂村弘さんのエッセイがおもしろいって言ってたでしょ。

紅 エッセイに、生身の人間があまり出てこないから、かえってどんな人かと思わせるところがおもしろいと思うのかなあ。——学校では短歌以外に同人誌を作っておられるそうですね。

紅 はい。「シエスタ（おひるね）」という同人誌に入っています。小説とか詩とかいろいろ。文章の書き方とか表現とか、短歌以外でそういう話のできるのがおもしろいです。

裕子 京大短歌会と文芸サークルとどっちがおもしろいの？

紅 細かいことは短歌会の方が話しやすい。

裕子 技法があるから？

紅 助詞ひとつにしても分かってもらえるし。

裕子 文芸サークルに短歌もっていくでしょ、みんなどんなふうにするの？どんなリアクションがえってくる？拒否反応はない？

紅 読みにくいみたいやね。

裕子 文芸サークルの人は今度の作品についてはなんて言っ

ね。穂村さんは直接見えないけどさ。

紅 うん……作者の本物の顔でも、作った顔でも、一人の人間の存在がわかったほうがおもしろいなあ、ってこの頃思う。

裕子 「私」が見えないと安心できないんやろうね。これが不思議なところで。私があなたくらいの年齢の時は、署名なんていらないうって思ってた。一首の屹立性なんて偉そうなこと言ってた。

——最後になりますが、ひとことずつお願いします。

紅 のんびりやっていけたらいいなあ、と思っています。

裕子 受賞作よりも、三月号の受賞第一作のほうが良かったと思います。暗い透明感みたいなものがあって。文語の使い方に落ちつきが出てきて。読んでいて違和感はないですね。そこがプラスとマイナスで。暴力的でちょっと評価できないような作品をひっさげて出てきたんだしたらおもしろかったですけど。まあ、それは資質の問題だから。寡作というの資質の問題なんだけど。ただ、優等生づくりばかりしているのはしんどいと思うのです。行き詰まりやすいから。駄作をたくさん作れるのも才能のうち、とこのごろ思うのですが。

——とにかく短歌をやめずに頑張るって欲しいと思います。

裕子 ほんとにそう。若い人はちょっと傷つくとすぐにやめてしまう。浮き沈みがあっても続けるのがいちばん大事。

——今日は、どうもありがとうございました。

（平成九年二月十七日 京都 からふね屋にて）